
私には視えている

八雲紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私には視えている

【Nコード】

N9401Z

【作者名】

八雲紅葉

【あらすじ】

5月のGW明け、東京の高校に澄野大輔が転入してきた。転入初日、どの部活に入ろうかと校内を歩いていると、学校内で起こっている出来事などを解決する部に所属している先輩の佐伯瞳に出会い、半ば強制的に入部させられてしまった。そして、その部で起こるさまざまなことを解決していく

く 出会い く (前書き)

この話は当然のごとくフィクションです。作内に登場する、地名・人物・建築物名・などは……中略……関係ございません。そして、この作品は合法ドラッグなどの売買、使用などを助長するものではありませんのであしからず

く会い

あの人って一体何なの？

なんでも人が考えていることが分かるみたいだよ。

なにそれ。チヨ一気持ち悪いじゃん。

だから皆近寄らないんだよ。

確かに近づきたくないよね。頭の中なんか読まれたくないしね。

皆が私の事を貶している。確かに私は人の頭の中を視ることが出来る。

だからといって何故こんなにも気持ち悪がれるのだろうか。

私には理解できない。相手にも理解できない。

お互いに理解できないのだったら、理解しなければ良い。

そうすればお互いに良いことだけになる。

私と関わりを持たなければ、私は自由になれるのだから。

* * *

「はい。皆。今日はちょっとしたサプライズがあるから少し静かにしてね」

GW明けで久しぶりに会い、話したいことが沢山ある生徒達の声でざわついている教室から、鈴のように澄み切っていて聞き取りやすい教師の声が聞こえる。廊下で一人立たされている俺には向けられていない声。

「よし。静まったね。それじゃあ澄野君^{すみや}。入ってきて」

ようやく教室内が静まり、俺が呼ばれた。トビラを開け教室に入ると、生徒達からほとんどが好奇心で形成されているであろう視線

が俺に突き刺さる。教壇までの距離は歩数で言えば5、6歩だが、視線の所為で少し長く感じる。

「親の転勤で今日からこの2・2に転入してきた澄野君。それじゃ自己紹介して」

「澄野大輔です。親の都合で北海道から来ました。元いた高校ではえっと、運動部に入っていました」

転校なんて産まれて初めての経験なので、こういう自己紹介というのはとてもやりづらいというかなんと云うか。それに人の視線が集まっている中で話すのは好きではない。緊張してしまうからだ。

「それじゃ澄野君はあその空いている席に座ってね。教科書とかも違うと思うけどソレはおいおい用意しておくから」

先生に「はい」。と返事してから、教室の窓側で一番後ろの席が空席なので俺はそこに腰掛ける。窓越しに雲ひとつ無い空が見える。

「よう。転入生」

席に着くなり、席の右隣にいる明らかに日サロで焼いたと思われる肌をした男子生徒が声をかけてきた。

「俺は石田三和いしだ みつかず。この高校、いやこの町の情報網の中心にいる人物だ。以後覚えていてくれよ」

石田は俺に口出しをさせる暇なんて与えないようにしているのか、それともただ話したが屋なのか、早口で自己紹介をしてきた。

「ああ。よろしく」素っ気無く返事を返す。

「なんだよ。テンション低いなあ。朝はスロースターターだから話しかけるなっていうことか？」

五月蠅い。たったそれだけで言い表すことができるほどコイツは五月蠅い。相手のことなんか考えていないのか、お構いなしのマンシガントークは続く。

「石田！ お前かなり五月蠅い！ 澄野君が困っているでしょ！ それにいつになったらその金髪を黒く染めてくるの!？」

学校黙認だと思っていたが、そうではなかったらしい。石田の頭髪は金色というよりも黄色でワックスか何かで固めているのだろう。

触ると刺さりそうなほど勇ましい棘が形成されている。

「明美ちゃん。転入生と俺との扱いの差がありすぎるのは良くないと思うぜ。教師は全生徒、平等に接しておかなきゃ」

「先生を明美ちゃんって呼ばない！ とにかく、その金髪はなるべく早く黒に染めること。それじゃホームルーム始めますっ！」

先生は石田とのやり取りを打ち切り、ホームルームを始めた。内容としては時期が時期なので中間テスト3週間前だから勉強しなさいよ。とのこと。そのほかは俺に関係するようなことではなかったのでもあまり聞いていなかった。いや、聞けなかったと言った方が正しいのかもしれ

ない。何しろ、ホームルーム中も石田は俺に話しかけ続けてくるからだ。この学校に在籍している女性の3サイズはもちろんのこと、校長や副校長の弱みをいくつか握っているらしい。流石自称でも情報網の中心にいる男なのだろう。でも五月蠅い。

「スミヤン。お前に良い情報をあげよう。と言っても良いが、この学校にいる生徒なら誰もが知っている情報だけだ」

スミヤンとは俺のことなのだろうか？ ホームルームが終わり、先生が教室を出ると石田はそう言いながら俺の机に腰掛ける。おおかた7不思議やそんなものだろう。

「良いか？ 驚くんじゃねえぞ。7不思議とか眼じゃないほどの存在。妖怪レベルの奴がいるんだよ、この学校には！」

「妖怪って、それこそ7不思議と大差ないじゃないかよ。それと妖怪なんて本当にいるのかよ。座敷童子とかなら大歓迎だが」

自分に幸福を呼び込む類のモノだったら良いのだが、襲い掛かってきそうなものならノーセンキュー。一生関わりたくはない。と、言うより、その手の話は聞いていてもつまらない。俺は妖怪なんかがこの世にいる事を否定しているのだから。

「妖怪さとの人間バージョンがいるんだよ。さとりって妖怪は人が考えていることを見透かすことが出来るんだが、その人もさとり

と同じ事が出来るらしいんだ」

「はいはい。そこまでな。そんな噂を流すんだったらお前は少し勉強でもしたらどうだ？」

俺らの会話を打ち切るように漢和辞典を持った教師が、その辞典で石田の頭を叩いた。叩かれた所為で頭のとんがりが3つほど潰れてしまった。

「学年トップで進級したんだから別に良いじゃんよ。それに俺は生涯、勉強は学校でしかない主義なんで」

いかにも頭が悪そうな風貌の持ち主である石田が学年トップだという事は、口から出たデマカセだと信じたいことだが、教師は生のゴージャを噛み潰したような顔をしながら何も言わずに戻っていくところを見て、どうやら石田は本当に学年トップらしい。正直信じることができない。

「オイオイ。なんだいその眼は。俺は頭良いんだぜ。もしわかんないところがあつたらいつでも聞いて良いんだからな。もちろん情報と交換だけだ」

俺の目から出ている疑心暗鬼ビームを感じ取ったのか石田はおどけながらそう言う。どうしても石田が賢いとは思えない。これはいつたいどういふことなのだろう？ 風貌の所為だろうか？

そして情報。これから必要になりそうなので少しずつ集めていこうと思う。

放課後、結局石田からささりの正体は聞くことが出来なかったの自分で探すことにした。

廊下からは、体育服やユニフォームを着て部活をする生徒。校門付近で立ち止まっている生徒や歩いている生徒が見える。この学校は生徒に必ず部活動をやらせているため、入部していない生徒には無理矢理にでも入部させようとしている。なので、今帰宅している生徒の中に帰宅部はいないだろう。帰宅部は俺だけ。いっそのこと帰宅部というものを本当に作ってしまおうかと考えるが、活動内容

は帰宅するだけなので学校側が許可しないだろうが。

「ほう。面白そうなことを考えているな。少年。それに私を一枚噛ませてくれぬか？」

急に聞こえた声には俺は顔を上げると、視界にはプリーツの入った学校指定である紺色のスカートから伸びる白い女性の足が映る。

驚いた俺は距離を取るために後ろに跳ぼうとしたが、何故か俺はしゃがんでいたし、背面に板のようなものがあり上手く跳べなかった。おそらくはドアがあるのだろう。というか俺はいつの間にもこの部屋に入ったのだろうか？ そして俺は何故しゃがんでいた？ いくら考え事をしていたからって、どこかの部屋に入るなんて事は出来ないだろうし。

「なにをそんなに驚くことがある。人の考えていたことが分かったからか？ それに関しては私の所為ではなく、君の所為だよ。君はブツブツと独り言を呟きながら私の部屋に入ってきたのだから」

彼女は俺を正面から見ながらそう言う。

もしかして誰かに聞かれるほど大きな声で呟いていたのだろうか？ だとしたら恥ずかしい。羞恥心で顔が熱くなっているのが自分でも分かるほど赤くなっている。

「め、目の前に人の足が急に出てきたら誰でも驚くよ！」

目の前の少女はゆっくりと椅子から降りて俺に向かって歩み寄ってくる。

「そうか。それはすまなかった。それで、我がケンドウ部になんの用だ？ なにか不可思議な現象でも起きたか？ それとも学校内で事件でも起こったか？」

剣道部。それにしておかしな事が沢山ある。まず、練習で使う竹刀や防具が見当たらない事。それに関しては他の生徒が使っているのではないと説明できるだろうが、もしその他の生徒がここではない場所で練習しているのだったら、目の前の少女は何故ここにいるのだろうか？ そして、剣道部の部員がなにゆえ不可思議な現象などを聞きたがるのだろうか？

「そういえば、私達は初対面だったな。私は佐伯瞳さえきひとみ。このケンドウ部のたった一人の部員で部長だ」

「俺は澄野大輔。今日、転入してきたから部活にはまだ入っていない」

「防具が無い理由が分かったかもしれない。だが、たった1人だけのこの剣道部はなぜ存続しているのだろうか？ 彼女1人がいても活動なんて何も出来ないだろうし。」

「それはちょうど良い。我がケンドウ部に入部してくれ」

彼女、佐伯さんは俺の手を握る。彼女の体温が手から流れ込んでくる。やはり彼女は剣道をしているわけではなく、部のマネージャーでもしているのだろう。手にマメらしきものが出来ていない。やわらかい少女の手の感触だ。

「待ってくれ。ここがどんな活動をしているのか分からないのに簡単に入部なんかは出来ない。そもそも佐伯さん一人しかいないって部として認められているのか？」

「気持ちに余裕が出来たのでこの部屋についてまとめてみよう。まず、この剣道部の部室は綺麗過ぎる。というよりモノが無さすぎだ。唯一あるとしたら部屋の奥にある長机とパイプ椅子。長机の上には学校では支給されるはずもないとても大きなデスクトップ型のパソコン。おそらく自作したパソコンだろう。そして邪魔としか言いようがない場所。部室の中心に設置されたロッキングチェア。ソレしかないのだ。」

そして、部屋の横幅は標準というか、部屋の奥にある長机2つと半分くらいで奥行きが4つか、4つ半といったところだろうか。一般的かどうかかわからないが狭くもなく、広くもない部屋だ。

「俺は剣道部と他の部と間違えているのだろうか？ だとしたらいいたいどんな部活なんだ？ ケンドウ部？ 県道部？ 謎である。」

「そうだね。まず、この部活の表札を見てくることをオススメするよ。君はさつきから色々な事を勘違いしているからね」

彼女の言うとおりに部屋を出て、出入り口の横に備え付けられてい

る木製の表札を見てみる。

俺が何かを間違えているのか。それとも彼女が表札を書き間違えたのか？

目を擦ってからもう一度見るが、表札に書いてある文字は変わってくれなかった。

表札には彫った後に文字の部分だけ黒く塗ったのか、【剣道部】とではなく【見導部】と達筆な字で書いてあったのだ。

「見導部とはこの学校で起きた事件などを解決するために作った部活。とは言ってもちゃんとした依頼なんか創部以降1つも来た事ないんだけどね」

表札を確認し終わった俺は、このわけの分からない部活から逃げようとする。が、腕を掴まれ引つ張られる。

彼女の腕のどこに筋力があるのだろう。と思うぐらいの大きな力で部屋に引き戻そうとしてくる。

「そんなのどうでも良いから手を離してくれ。俺は何も知らない。他の部に入るんだから離してくれよ！」

「そう言うわけにはいかないんだよ。私は君が必要なんだ。君だって運動部に入ろうだなんて思っていないみたいだし。この部は楽だよ。さつき言ったとおり依頼を求めている部なのに依頼なんて入ってこないんだ。活動なんてしなくても良いんだよ？」

確かに美味しい話かもしれない。今更、部に入部したってレギュラーに入れると決まっているわけでもないし。ただ名前を貸すだけで楽できる部活があるんだったら俺はそれを利用すれば良いんだ。

「わかった。わかった。入部するから。だから離してくれ！」

ようやく入り口での攻防戦が終結した。代償として見導部への入部と腕の痛みを手に入れたわけだが。

「それじゃあまず、この部に依頼が入ってこない理由が何かを考えてみてくれ。簡単だと思うから」

そもそも、この見導部の部室はどこにあるのだろうか？ さつきの攻防で目の前がガラスの窓だったので外の景色を見ることが出来

たが、高いところだということしか分からなかった。教室のある2階とは景色が違ったからだ。おそらくは5階か6階のどちらだと思っ

う。「君は鋭いね。ここは6階。この学校で一番高いところにある部屋だよ」

だとしたら、原因は場所だろう。この学校はエレベーターという気が利いた設備なんてないので、わざわざ6階まで階段を使って昇るといふ行為はただ疲れるだけだ。俺も若干だがふくらはぎが疲れている。というか、無意識で教室のある2階からここまで来ていたのか俺は。

それと、最近プライバシーだとか、そういうものが五月蠅くなつてきている所為だろう。そうでなくても他人に自分の秘密などを打ち明けるなんてことはしないだろうから依頼なんて来ない。つまりはそういうことなのだろう。と勝手に俺は考える。

「まあ、君の答えも正しいと言えば正しいのだが他にも原因がある。だが、その原因を取り除くのはちょっと困難なんだ」

佐伯さんの顔が曇る。どうしたのだろうか？ そんなに原因を取り除くのが困難なことなのだろうか？ 部室の移動以外にも何かあるのだろうか？

それより、俺は一人で考えながらぶつぶつと呟いていたか？ 考えていることが佐伯さんには分かっているよな気がする。ちゃんと会話も成立しているみたいだし。

「呟きすぎだよ。君は。さて、ここで君が入部してくれるのであれば、もしかしたらその原因を取り除くことが出来るかもしれないんだ」

部室に戻ると彼女は邪魔な椅子に座らずに奥にある机とセットで配置されている椅子に腰掛けていた。俺は立ったまま。というより他に椅子が無いのだ。邪魔な椅子を除いて。

「俺が入っても何をすればいいんだ？」

「そうだな。君には主に全ての業務をしてくれば良い。私は君の補

佐役に徹すれば大丈夫だと思っから」

ソレを聞いた俺はすぐに部屋から出ようとする。話が違う。俺がこの部に入ったら活動しなくても良いと彼女は言っただ。

しかし、トビラには沢山の南京錠が取り付けられていて、俺の脱出は実行する前から失敗していたのだ。さっきまで部屋の奥の椅子に座っていた彼女はいつ、両の手の指では数えられないほど沢山の南京錠を取り付けたのだろうか？ そしてこの技術を身に付けるのに一体どれほどの修行が必要なのだろうか？ 俺はそんな技術を欲しいとは思わないが。

「我が見導部に入ってくれるよな。少年？」にこやかに笑う彼女。性格が悪いといつかなんとだろうか。

「その少年や君って言うのをやめてくれるなら考えてもいいさ」

逃げることに出来ない今の俺がどんなに足掻こうとも、彼女の思うとおりに事が運ぶ。それが悔しい。でも、どうすることも出来ない自分に対しても悔しい。

「そうか。それじゃあ大輔。この入部届けに名前を書いてもらおうか」

佐伯さんから手のひらほどの大きさの入部届けを俺の左手に、ポールペンを右手に手渡される。

受け取った俺は入部する以外の選択肢はもはや存在すらしていないので従わざるを得ない。そうでなければこの部屋から出ることすら出来ないと思うから。

「そうそう。私の事は名前で呼んでくれ。苗字で呼ばれるのは好きじゃないのでね」

「わかりましたよ瞳さん。それで、今日は一体何をするんですか？ いくら依頼が来ないといっても、こんな早い時間にシャッターを閉めるのでは依頼なんぞいくら待っても舞込んで来ないだろう。

「いや。転入してきたばかりの大輔のために今日はこの街を案内してあげよう。どうせ依頼なんか来ないわけだし」

依頼が来ないのはこの異常なまでに早い閉店時間が原因の一つだ

と思った。まだ帰りのホームルームが終わって30分も経っていないのに、元部長が帰ってしまうのだから。

その後、俺と瞳さんは街を徘徊した。学校から歩いて15分ほどの場所にある、端から端まで全力で走れば1分もかからないで辿り着けるぐらい小さいながらも、エネルギーが溢れ出るほど活気のある商店街。その商店街の中心地点からのびる整備されている道を進むと町を一望することが出来る高台にたどり着く。

そこが彼女にとってお気に入りの場所なのだろう。今日始めて会って彼女のことを何も知らない俺だが、えくぼが上がっている瞳さんの顔を見る限りそう思えたからだ。

ここでゆっくりと沈む夕日を二人で何も語らずに眺めてから今日は解散した。

自宅に帰るが誰もいない。それも当然で親父は今、東京どころか日本にもいない。深くは聞かなかったが、今は日本の裏側にいるそうだ。一人息子を置いてどこへ行っているのやら。考古学者という生き物は住処に帰ることすら出来ないのだろうか？

親父の事はもう諦めているので簡単なメシを作る事にする。メシはパスタを茹でて食べれば良いし、あとは適当にメインディッシュを作れば良いだろう。

メシを終えた俺は風呂に入り、ベッドに潜る。

さて、寝る前に今日起こったことを整理してみよう。

まず、一番の出来事といえば瞳さんに会い、見導部に入部したことだろう。あの不思議でしかない空間で俺は契約することをねだられ、それに従うしかなかったから渋々承諾してしまった。もしあそこで断ることが出来たのなら他の部活に入ることが出来たのだが、出来なかった

ことをいつまでもグダグダと言うのは、時間の無駄だからやめておこう。

そしてもうひとつ気になることと言えば、妖怪さとの人間バー

ジョンと呼ばれる人の正体。

一体どんな人なのだろう？ インターネットの検索で引つかかる情報なんてデマカセ以外のなにものでもないのでアテにならないだろうし、やはり情報の持ち主である石田本人に聞くしかないだろう。しかし、アイツから情報を聞くには他の情報が必要なだろう。何か特別な情報があればいいのだが、この街のことを何も知らない俺に特別な情報など集めることは出来ない。結局は諦めることしかないみたいだ。

今日は転入初日というだけあって色々なことが起こりすぎたが、今はもう寝ることしかやる

ことが無くなった。夢ぐらいは平穩に過ごしてみたいものだ。

〈初めての依頼〉

翌日、登校するなり石田が話しかけてきた。今日も五月蠅い。

「まだ部活入ってないよな？ それだったら一つだけオススメしない部活があるんだ」

「悪いが、もう部活には入ったよ」

瞳さんが影の部長となり、俺が部長になったという、どうしようもない部。見導部に。

「そうか。それでな、見導部だけはやめておけ。あそこに入った人は皆、口をそろえてこう言うんだ。『あの人はオカシイ』ってな。」

「確かに見導部はオカシイけどよ。それで瞳さんの事を悪く言うのはやめろよ」

石田の口ぶりでは見導部というものはそんなにおかしいものではなく、瞳さんの方がおかしいのだという風に聞こえる。というか、俺はもう部活に入ったというのにそんな情報を話さなくても良いじゃないか。絶対人の話は聞いてないだろうコイツは。

「スミヤン？ どうしてそんなにあの人のことを擁護してるんだ？」「どうしてって。ちよつと変な技術を持ってたり強引なところがあるけど、普通じゃないか。どこにでもいる先輩じゃないか。それをどうしてそんな事を平気で言えるんだよ」

俺の言葉を聞いた石田は固まっている。なにかを考えているのだろうきつと。それと石田だけではなく、教室にいる人達全員が俺の声を聞いたからなのだろうかこつちを向いて固まっている。もしかしてこのクラスメイト全員も瞳さんのことをオカシイと思っているだろうか？ もしそうだったら、俺はこのクラスの全員とは友達になることは難しいだろう。

「……あのよ。スミヤン。俺が昨日言った人間版さとりって言うのが佐伯瞳なんだ。彼女と関係を持ってしまったのか？」

「そうだよ。昨日付けで見導部の部長になった。それより、お前ら

がオカシイと思ってる瞳さんはどういう風におかしい。いや、それは昨日聞いたか。人の考えが読めるって言うんだったよな？」

昨日はそんなことがあっただろうか？ それとも何も知らない人にはそういう事はしないのだろうか？ もしそうだとしても人を疎外するなんてあまりにも酷いだろ。

「ああ。その見導部に依頼を頼もうとした人の話なんだが、依頼を言う前に依頼の内容が話される。そして、話してもいない依頼の内容の情報源を聞くと、毎回同じ答えが返ってくるんだ。『君の頭の中からだよ』ってな。オカシイと言うしか他に無いだろ」

石田の説明が終わると不意に俺の携帯が震える。画面を見ると噂をすれば何とやら。瞳さんからのメールだった。昨日アドレスなどを交換したのでちゃんとメールが送れるかのチェックかと思いメールの内容を見ると、放課後のお呼び出しだった。

「スミヤン。もしかして、佐伯瞳か？ まあ、その、なんだ。俺からはもう言えることなんか無いが、その、頑張れよ。お前はもう逃げられないっばいし。なにかあったら話ぐらい聞かせ」

依頼を頼まれる部活に所属しながらも、他の人に依頼を頼むことが無いと良いが。

「ああ。そんなことはないと思うがな」

クラス中から好奇心で固められた視線が、たった1日で奇妙なものを見るときに使う視線に変わった。別にそれでも良い。友達にはもうなれないと思っっているから。

授業も終わり、石田から瞳さんの情報を少しだけ手に入れ部屋に向かう。その手に入れた情報というのは、彼女の学年、クラス、出席番号、身長、3サイズ、と無いに等しいが、何も知らない状態では幾分かマシだろう。

「瞳さん。今日はどうするんですか？」

「せんだみつおゲーム！」

「イエーイ！」

部室のドアを開けるなり、対面する形で立っていた瞳さんがそんなことを叫ぶ。つられて俺も乗ってしまった。瞳さんしかいないが恥ずかしい。

「せんだ！」

「みつお！」

「ナハナハ！」

1回やったが、2人で行うコレには終わりが無いことに気付く。瞳さんが指差しながら「せんだ！」と言い、俺も指差しながら「みつお！」と言う。そしてみつおと言われた瞳さんの両端。つまり俺だけが「ナハナハ！」と言う。そしてまた瞳さんが「せんだ！」と言う。無限ループである。

そして、もしかしてこんなことをしているから周りからオカシイ人というレッテルを貼られているのだろうか？ だとしたら今すぐにもこんな事はやめさせたい。というか、俺は廊下においてドアを閉めていないから俺達の声が廊下にも響いている。余計に恥ずかしい。

「確かに無限ループだな。それにしても大輔はノリが良いな。そういうノリの良さは好きだぞ。でも、レッテルを貼られた理由はそんなことをしたからじゃないことぐらい、大輔だってわかってるんだろ？」

確かに今のノリの良さは俺自身でも褒めることができるほどのものだった。でも、いきなりこんなことはやめて欲しい。

「流しても良かったんですけど、その後の惨事を想像したら乗らざるを得ないというか。ソレよりもさっきの無限ループ、頭の中覗きましたね？」

「私の情報はもう持っているんだろう？ だったら存分に頭を視ても良いってことだよな」

ニヤニヤと笑いながらこの人はなんてことを言うんだ。

超理論というか、ジャイアニズムというか。まあ俺には防ぎようの無いことなのでどうしようもない。

「それで、今日の放課後ずっとせんだみつおゲームをやるわけじゃないですよね？」

俺は部室に入り、彼女はお気に入りであろう椅子に腰掛ける。

「早速、見導部の宣伝を開始しようか。大輔も分かっているようにこの部に依頼が1つも入ってこない理由はこの私がいる以外のなものではない。そこで、大輔を部長にして私は裏部長になれば少しだが依頼来るようになる。私はそう想像している」

瞳さんの提案にケチをつけるとしたら、裏部長は一体どんな仕事をするのか。その一点だけである。他にもケチを付けたいのだが、部長になるというのは昨日契約してしまったのでどうしようもない。「裏部長と言うのは、大輔じゃ出来そうにないことをやるポジションのことだ。相手の心を読んだり、情報を探したり。もちろん情報は自称情報屋の奴なんぞとは比べ物にならないほど信憑性の高い情報だ」

役割ははっきりしているので、俺だけが働くというわけではなさそう。まあ、それも依頼が入ってこなければ仕事も何も無いのだが。

「そうだな。まずは依頼をしたいという気持ちにさせることが大事だな。校内掲示板に張り紙でも張れば幾分マシな状態になるんじゃないか？」

「まあそうだと思うけど、人に打ち明けるほどの依頼なんてよほど小さいか、一人じゃどうしようもないくらい大きな問題じゃないか？ それに依頼を頼むとしても簡単に言えるわけでもないし。俺だったら、信用出来なさそうな人には絶対相談なんかしないと思うけど」

依頼を頼む人。この学校にいるのだろうか？ 人が困ることなど多々あるが、それを相談するとなると、普段から近くにいる人ぐらいにしか相談なんてしないだろう。それに部員は妖怪さとりと昨日転入してきた男。信用しろって言うほうが間違っている。

「確かに信用しろというのは無理だろうな。私だったら信用なんか

出来るはずないし。それに今まで来た人達の依頼はとも小さなものだったぞ。勉強が出来ないとか、可愛がっていたペットが帰ってこないとか。まるで小学生レベルの依頼だったよ」

瞳さんは呆れているのだろう。両肩を下ろしてため息をつく。

高校生になつてまでそんな依頼を頼もうとするなんて。そっちの方がよっぽどオカシイと思えるほど幼稚な依頼だ。

「世の中は多数決。私の事をオカシイと知っている人が沢山いれば、私はオカシイ人として生きていかなければいけないのだ。仕方ないことさ」

確かにそれは仕方ないことだと思うけど、ソレを受け止めることは俺には無理だろう。それなのに瞳さんはどうやって受け入れたのだろう？ 若干だが彼女の顔は曇っていることを見るかぎり全てを受け入れたわけではなさそうだ。

「とりあえず今日も何も出来ませぬ。どうします？」

「今日も街をぶらつこうか。もしかしたら事件に巻き込まれるかもしれないからな」

もしかして、昨日の徘徊は俺を案内する気なんてさらさら無く、ただ事件を捜し求めるための口実だったのだろうか。もしそうだとすると、結果的に街のことを知ることが出来たのだから文句などは言えない。

「それにこんなにも可憐な少女と街を歩くななんて大輔の生涯じゃもう出来ないかもしれんぞ。だったら今を存分に楽しまなくてはいけないな」

可憐な少女。たぶん瞳さんのことなのだろう。と、彼女の前でこんな失礼なことを考えているだけで怒られるだろうから考えたくなかったが、考えてしまったのだから彼女が何か言う前に謝らなければいけない。

「別にそう言う風に言われることは最近無かったものだからそんな気にすることは無いが、確かに謝ってほしいものだな。私だって女性なんだ。それぐらいは大輔にもわかるだろう？」

正面から目を細めて見られる。口元が上がっているので怒っているわけではなさそうだ。

確かにというより外見は普通の女性。それに石田の情報では上から86・64・84と男の視線を独占することが出来るプロポーションを持っているし、黒く長い髪を結わずに伸ばしている。そして173cmと女性にしては大きい身長。注目の的としか言いようが無い。

「あの自称情報屋から聞いた情報はやはり使えないものだな。大輔私のバストサイズだがそれは先月のもので今は2cmアップの88cmだ。ほかの場所のサイズは同じだがな」

石田の情報は本当にアテにならないというか。それにしても1月で2cmもサイズアップするのだろうか？ 男として興味あるがそれを聞いても何かが変わるわけではない。ただ瞳さんの俺に対する見方がマイナスの方向に向かうのは間違いないだろう。

結局今日も街を徘徊するだけと、部活なんてものはなかったのさ。と言いたくなるほど何もしていない2日間。でも瞳さんといることが苦痛ではないし、少々ながら無茶を言われることはしばしばあったが、むしろ楽しいと思える2日間だった。

帰宅後、何をする時間もなくて時間を持て余した。依頼を呼び込むことが出来るほどのポスターなど、俺は作ることは出来ない。

さて、いったいどうしたら良いものか。瞳さんに聞いても良いが、それで良い返事が返ってくるわけでもないし。むしろ良い返事が返ってくるのであれば、俺がこの学校に来る前から実践しているだろう。

しかし、もしかしたら実践したくても出来なかったのではないだろうか？ 学校内で妖怪さとりと恐れられていたのだから。

と、どうしようもない事を頭の中で何回も繰り返し返した所為か、空はずでに真っ暗。月は俺の考え事が行き詰って真っ黒になった頭の中を、光で白くするぐらい眩しいほどに輝いている。

* * *

放課後、見導部に毎日顔を出しては、すぐに街を徘徊する。コレが習慣になってはや1週間。

すでに二人で一緒にいるということが当たり前になった日、初めて依頼と呼べるものが見導部に舞い込んだ。

「すいませ〜ん。頼みたいことがあるんですけど」

ドアがノックされ、女性の声が聞こえたので部室内に入れる。邪魔そうに椅子を見た後に俺が入部し部屋の隅に新しく設置したパイプ椅子に座らせて話を聞く。この椅子を邪魔だと思う人がいて、俺だけがそう思っているという考えは消えた。少しだけ嬉しい。

低い背にショートカット、人懐っこそうな大きな瞳。そして童顔。合法ロリというものはこの世に存在していた。まあ俺自身ロリコンではないので興味ないが。

「大輔。お前はいつもそんなことを考えているのか？ だとしたら今すぐに退部してもらおう。我が部に変態はいらない」

考え事が見られてしまうので、これからは注意していきたいが俺も男なのだ。そういうことを考えてしまうことも多々あるので、すぐに退部は勘弁してもらいたい。それに興味がないと思っただんが、それは視てくれなかったのだろうか？

「それで、どんな依頼を持ってきたの？」

「それより、まず名前を聞くのが先だろう。君は部長なんだ。少しはしっかりしてくれ」

裏部長は偉そうに奥の机に座って俺をけなし続ける。そんなことを言うのだったら自分で応答すれば良いのに。と、考えればまた愚痴をこぼされてしまう。うかつなことなんか考えられない。今だって背後から鋭い視線をぶつけられているのだから。

「2・2の新井めぐみです。同じクラスだから名前ぐらいは覚えてくれてると思っただんですけど」

彼女は物寂しげな表情になってしまった。同じクラスの女の子。

いままでクラスの人とは石田としか会話した覚えがない。転入初日でワラワラと集まってこなかったし、2日目からも石田としか話してないから、他の人の名前を覚えることなんかなかった。

「それで、依頼は？　ただ会話をしに来ただけならば今すぐ退室を願いたいのだが」

「すみません。依頼っていうほど物々しくないんですけど、園芸部の手伝いをお願いしたいんです」

俺の所為で機嫌が悪くなってしまったのだろうか？　瞳さんは新井さんにもきつく当たる。

ただでさえ依頼がない中でそんな対応が良くできたものだと思う。自分が依頼を解決したいがために、この部を作ったのだと思ってるんだが違うのか？

「どんな内容なんだ？　俺達で出来そうになれば申し訳ないが断らせてもらうけど」

たった2人しかない見導部に人海戦術を頼みたいのならば、断らざるを得ないし、第一こんな部に相談するんだ。どうでも良い内容でしかないと思うが。

「少し、男手が欲しいんです。校舎脇にある小さな畑を耕すのに女性だけでは時間がかかりすぎてしまうので」

今の話しぶりだとからすると、園芸部は顧問を含めて女性だけで構成されているということだけがわかった。しかし、こういうことがありうるものがわかっていながら、男子生徒を徴収しないことに疑問を持った。まあおおかた、男子生徒が全員園芸に興味がないからだろうと、簡単に推理できてしまうが。

「わかった。それじゃあ早速そこに行こう。瞳さんは依頼が来たらちゃんと応対してくださいよ。すぐに人を追いつ返すようなことだけは駄目ですからね」

瞳さんにそう言ったものの、あの人がちゃんと俺の言いつけを守るとは限らない。それに、依頼が来るかどうかも不安だ。

しかし、なぜこの1週間依頼も何も入ってこなかった事件だけを

追い求める見導部にこんな小さな依頼が入ってきたのかというと、事件だけを探しても依頼など来ないことはこの1週間で重々承知したので、【何でも屋として売り出していけば少しずつだが来るのではないか?】という俺の提案でやりだした結果がコレなのだ。ようやくその成果が実った。俺が考えて実行して成功したのだから結構嬉しい。

依頼を行う畑は縦5m×横7mぐらいの大きさで、コレを1人でやるには荷が重い量だが、瞳さんや園芸部の子に手伝わせるわけにはいかないので1人で頑張るしかない。

「澄野君って北海道の方じゃ運動部に入ってた、って言ってたけど何部だったの? 結構がっしりとした体型だから野球部とかなの?」

依頼主である新井さんは隣で肥料か何かを撒きながら話しかけてきた。いくら隣にいるといってもTシャツを着ているのにも関わらずにそういうことがわかるのだろうか? いや、体型ぐらい分かるか。肩幅とかは普通に見えるんだし。

「秘密にしておくよ。そっちのほうがミステリアスな感じで面白そうだし」

鍬を大きく振りかぶって地面に突き刺す。長いものを振りかぶって下におろす動作は昔からやってきたことなので、結構簡単に出来る。でも、鍬が重いので疲れ方がはんばない。

「え〜なにそれ〜。部活ぐらい教えてくれても良いじゃんよ〜」

頬を膨らましながら彼女はそう言う。そして、八つ当たりなんだろう。肥料を地面に向かって投げつける。そんな撒き方で平気なのかと心配してしまう。

「でも、少しぐらい教えてくれても良いと思うんだよね。澄野君って石田君としか話してるところを見ないし。」

「まあ皆が近づかなくなつた。つてのが一番大きな問題だろうな。

俺が石田としか話してないって理由は。でも話してるいつても、石田の話は結構流して聞いてるときもあるけどな」

石田の話は大抵俺にとってどうでも良いことなので、聞き流して

いることが多々ある。重要な話はアイツの知らない情報を与えなければ教えてくれないとわかっているからだ。足元を良く見ている商売である。

「私としては近づきたかったんだけど、周りの友達がやめろって言うから」

彼女は一見、その合法ロリというか、皆から守らせろと思わせることが出来てしまう外見なので行動を規制させられてしまうのかもしれないが、この畑仕事をしている短い時間からでも彼女の性格は自由奔放に遊ぶ小学生の女の子というものを想像してしまうほど、活発な性格の持ち主なのだ。

この園芸部も3年生がいながらも彼女が部長で、こういう仕事も彼女一人でこなすぐらいなのだから。少しアグレッシブすぎるかもしれないけど。

「そうか、まあ瞳さんの息がかかった俺だから怪しいと思われても仕方ないのかもな」

今のを瞳さんに聞かれたら退部モノの考えだろう。だが、事実なので仕方無いことだから退部だけは勘弁してもらいたい。お互いに困るだろうし。

「さて。こんなものでどうだろうか？」

額に滲み出ている汗を手の甲で拭う。腰を曲げざるを得ない仕事だったので腰が痛い。

「うん。大丈夫だよ。今日は本当に助かったよ。ありがとね」

彼女は丁寧な言葉を深々と下げるのを見ながらYシャツを着る。鍬を両手で力を込めて握り締めすぎていた所為か、両手の指を開こうとすると痛みを感じる。もう少し握力を鍛えようかと思うが、必要最低限は持っていると思うのでそんなに鍛えることはしないと思う。

仕事は1時間ほどで終わり、部屋に戻ると裏部長は邪魔なところにある椅子に座って寝ていた。寝顔を見る限りでは何処にでもいなさそうな可憐な少女。触ってしまうのを躊躇うほど綺麗な肌。唯一残念なのは口が半開きになっているところだろうか。それでも彼女

の寝顔は綺麗だ。

「帰ってくるなり人の寝顔を観察するなんて、大輔は変態なのか？
それと、この椅子が邪魔だと言うのか？」

黒い髪の間隙から今まで閉じていた目が急に開き、吸い込まれるほど綺麗な紅い目が俺を睨む。あまりにも急に開いたから声を上げて後ろに飛び跳ねてしまった。恥ずかしい。

「へ、変態って何だよ！ それにその椅子は明らかに邪魔だよ。新井さんだって明らかに邪魔だと思ってたよ。瞳さんだって視たんだから分かってるでしょうよ」

「いや。視てないぞ。私にも選ぶことをさせてくれ。それで、収穫はあったのか？」

「俺の内申点が少し上がったぐらいじゃないですか？ たった1回でこの部の事を、瞳さんの事を良いと思わないでしょうよ」

たった1回。されど1回と言うが、ほんの少し変わったぐらいで依頼がじゃんじゃん来るということは無いだろう。一番のネックである瞳さんがいるのだから。でも瞳さんへの心象は簡単に引っ繰り返るものではないだろうし。

「私の目の前で、私の事を考えると良い度胸をしているではないか。言うておくが、君の心象だって2週間後にあるテストでマイナスになることがあるんだからな。それだけはゆめゆめ忘れてはいけないぞ」

それは瞳さんにそっくりそのまま言い返す事だって出来るのだが、もしかしてテストの答えも人の頭を覗いて知ることが出来るのだろうか？ もしそうだとしたらカンニングとかそういうレベルではない。もうテストなんて意味を成していないただの文章でしかない。

「ホントに君はさつきから失礼なことばかり考えるね。テスト中はおろか授業中だって人の頭なんかを覗いたことは無いよ。私は全国模試1位の實力を持っているんだ。学校のテストなんて赤子の手をひねるぐらい簡単なのさ」

なんだろう。妙に説得力があるので、下手に反論が出来ない。反論したら絶対に勝てない自信がある。

「今、君の中を視させてもらったが、どうも英語が苦手なようだ。他の教科は可もなく不可もなく。言っておくが、平均点以上を取らなければ私は許さないからな」

この学校の平均点を知らない俺にとつて未知の世界である以上、がむしゃらに勉強しなくてはいけなくなってしまった。特に英語はどうにかテスト範囲だけを押さえておかなければいけない。てか、勝手に中を見るのはやめてもらいたい。

「まあ、この全高校生の頂点に君臨する私の手に掛かれれば、大輔でも平均点以上は簡単に取ることが出来るだろう」

「分かりました。でも俺のやり方で頑張ってみます。それでも駄目そうだったら頼りするかもしれません」

俺がそこまで言っていると、不意にドアが2回叩かれる。

新しい依頼主が来たのだろうか？ 返事をしてその人に部屋に入るように言っていると、本日2件目の依頼主が現れる。石田だった。

「よう、スミヤン。ちゃんと依頼は来てるか？」

気前の良い酔っ払いが入ってきたのかと思うぐらい、テンションの高い石田がやってきた。いつもより1.5倍ぐらい五月蠅い。

「さっき初めての依頼を終えてきたところだ。それで、お前は一体何の用だ？」

情報屋なのだから自分で対処できそうだ。それなのに依頼なんかを持つてきくるなんて。なにか危ないものでも運んできたのだろうか？ それだったらすぐにでも退室してもらいたい。

「いや。依頼だって。それも結構面白そうな依頼だよ。そっちのお方が好きそうなモンだしね。まあ今日はスミヤンの部長就任祝いってやつだぜ」

「好みだと。聞こうではないか。その面白い依頼とやらを」

さっきの面白くもなんとも無い依頼では、喰いつかなかった彼女は途端に元気になる。まったく持って現金な人だ。てか、就任祝い

で持つてくるのが依頼って。まあ部活としてはうれしいんだが、なんか納得いかない。

廊下に誰もいないことを確認したのか。身体を部室に首より先を部屋から出し左右を確認、ゆっくりとトビラを閉める。そして、暗幕も閉めて部屋は薄暗くなる。当然、暗くなったので部屋の照明で部屋は明るくなる。

「実は、この学校の生徒がヤバイ物に手を出したみたいなんだ。それでその裏を取って欲しいんだが」

さっきまで五月蠅かったあの石田がこうまで静かに喋るのは違和感でしかない。

「合法ドラッグか」

頭の中を視たのだろう。石田が伏せたモノの正体をすぐさま暴いてしまった。ていうか、いくら依頼人が石田だとしても、依頼が来たんだからその椅子から降りようよ。

それにしても合法ドラッグは普通の。いや、そういうものに手を出しているのだからもう普通ではないが、高校生にも出回ってしまっているものなのか？

「いや。大輔。合法ドラッグは、言い方は悪いかもしれないが、頭のいかれた馬鹿がやるだけではなく、痩せたいという願望を持つ女性が使ってしまうこともあるんだ。だから誰がやってもおかしくは無い。そんな世の中になっっているのだ」

「もしそうだとしても、そう簡単にクスリが手に入るものなのか？」
そこが問題だ。いくら合法でも見つかってしまえば、以前ニユーズで見たことがあるのだが、薬事法違反で捕まるのだ。まあリスクを犯しても欲しいものらしいが、俺はそんなものには興味ない。やはり需要があつてこそその商売なのだろうか？

「自称情報通の俺だけど販売元だと思われる場所には目星がついてる。そこで本当に販売しているかどうかを見てきて欲しい。でも分かってると思うけど、コレは危険が伴っているから無理はしないで

欲しい。スミヤンもそうだけど佐伯嬢も」

さとの人間版である瞳さんには気を付けると俺に言った石田が、その瞳さんの事を心配している。コレも違和感しかない。

「そうだな。内容はとても気になったが、報酬はなんだ？ お前から貰った情報はすぐにダメになってしまったから、俺の知らない情報あまりほしくないんだが」

「なんだと？ 3サイズと身長は最新のものだったんだぞ。それが間違っているだと。まさか……」

1mほど距離があるのだが、石田の唾を飲む音が聞こえた。

「私の事はどうでもいいだろう。盛りをついた猿2匹が。それで報酬は一体なんなんだ？ お前は報酬がないと考えているようだが、本当に何も無いのか？」

俺達二人を哀れんだ視線で蔑む。瞳さんも報酬が気になるようだが、報酬がないってどういう事だよ。ただ情報を俺達に渡すためだけに来たのか？

「ん〜。まあ本当になんだよな。これが。だからやりたくないんだったら、今話した事は忘れてくれ。俺も無かったことにするからさ」

「そうか。わかった。今回のことは忘れよう。それでは用もなくなつたんだ。お引取り願おうか」

瞳さんの言葉に石田は素直に従って部屋から出て行く。部屋には俺達二人が残された。

「さて。どうしたものか」

瞳の色と同じくらい紅い唇を突き出して考えている。

確かに、この依頼は危険が伴いすぎている。下手をすれば海に沈められるかもしれないし。俺としてはすぐにでも捨てたい依頼だ。こんなものやってばかりでは命が沢山あっても足りやしないだろう。

「海に沈められるって、あまりにも時代が古すぎないかい？ それに私はこの依頼をやる気だよ。石田がさっきの話を忘れるように言

つたんだ。つまり、この情報をどうしようかと彼には関係ないということになる。だったら私達はこの話に乗るだけだ」

では一体なにを考えていたのだろうか？ どうせやるんだっただら考えることなど無いに等しいのに。俺が行動することになるわけだし。

「いや、この事件には関係していない事柄だよ。それより君はもちろんこの依頼に乗るよね？ まさか、ここまできて降りるとかそんなふざけたことは言わないよね？ この依頼は君の就任祝いとして貰ったんだ。だったら大輔が行くしかないよね？ 私としては現物が欲しいから行ってきて欲しいんだがダメかな？」

コレは何かの罰ゲームだと思いたいよ。石田め。明日にでも会った文句でも言ってやろう。

「……わかりましたよ。それで場所は何処なんですか？ 出来るならば今日中に済ましたいんですけど」

もうテスト2週間前なのだ。普段であれば1週間前からでも早いのだが、今はそう言っていられない課題が出せられてしまったのだから少しでも勉強をしておきたい。

「そんなにテストのことが心配かい？ 大丈夫だ。5日もあれば私が付きっ切りで教えるだけで簡単に平均点以上を取れるようになるのだから」

そう言いながらようやくロッキングチェアから降りて、石田が置いていった地図を長机の上に広げ目的地に指を差す。もちろんそこには丁寧に油性ペンか何かで赤い印が付いている。

『キング・オブ・ザ・アウトローズ』。そこが今回の目的地だ

〜異変〜

陽が暮れ、等間隔に立てられた街灯が街を明るくする時間。俺は目的地であるクラブハウスがあると思われる場所に到着した。

しかし、この周辺の街灯だけが何故か光を発していないので先がまったくもって見えない。唯一の光源である月も雲の中に潜ってしまったのでお手上げである。入り口が何処にあるかが分からないので、中に潜入することが出来ないでいる。普通のクラブハウスだとしたら入り口はすぐに分かる。ネオンが眩しいほど輝いているだろうから。

ウロウロと道を歩いていると、何処からかドアが開くような音が聞こえ、そのドアの奥から流れている曲も微かに聞こえる。その音が鳴るほうへと歩みを進めると何かにぶつかった。感触からして人なのだが、胸板が堅すぎる。ボディガードなのだろうか？

「当店になにか御用ですか？ もしそうであれば案内いたしますが」
男性特有の低い声よりもさらに低い声でそう言う。やはりボディガードなのだろう。声に凄みがあるというか、一般人では簡単に出せるものではない声を発せられた。

「すいません。どこを行って良いものかまったく分からなかったの
で助かりました」

入り口が分からないこちらとしては好都合なので彼に道案内を頼んだ。入り口はとても簡単な場所にあったので、俺は何を見間違えていたのだろうかと考えてしまう。

クラブ内に入ると、よく分からないが洋楽なのだろう。聞きなれない言葉がフロアに大音量で流れている。フロア内にいる人はその曲に合わせて踊っている人、壁際に備え付けられているBARで飲みながら会話を楽しんでいる人。

そして、VIPルームなのだろうか、ガラス越しに俺らを見下ろすことが出来る部屋が上の階にあることが分かる。

とりあえず、ドラッグの情報を手に入れるためにBARで飲み物を頼むとしよう。よく小説や漫画とかの世界ではバーテンダーが様々な情報を持つているから。という自分でも浅はかだと思える考えを実行する。

人の波をかいぐりながらBARに向かうと、そこには金色のツンツン頭。陽に焼かれた黒い肌。と石田だと見間違えてしまうほどそっくりな人がバーテンダーをしていた。毎日見ている姿を見間違えるはずがない。アレは石田だ。でも、雰囲気が違う。他人の空似なのだろうか？

「ご注文は？」と、石田似のバーテンダーが短く言うので、唯一知っているカクテルの名前のスクリュードライバーを頼む。

「かしこまりました」

コレもまた短く言い、早速カクテルを作り出した。未成年だと思いながらも酒類を出すのは如何なものだろうと思うが、注文する俺も俺なので口出しはしないでここう。ここで厄介ごとをしでかすのは愚策でしかないのだから。

「すいませんが、最近この近辺でドラッグが手に入ると聞いたんですけど何か知りませんか？」

「どうぞ」と、オレンジ色のカクテルを出してくれたのでカクテルの2倍の値段を渡し、早速交渉を試してみる。

「あまりこういうことは言いたくありませんが、チップを貰ったので仕方ありません。あちらの方が新しく出回っているクスリを販売しておられます。もちろん私が言ったことは内緒にしてくださいね」
にこやかな笑顔はどう考えても似合わないバーテンダーはBARから反対側の壁側にいる男を手で示す。こういう事を聞かれるのは今までたくさんあるだろう。慣れているというか。もしかしたらチップを渡さないでも教えてくれるかもしれない。

そして、バーテンダーが示すその男は、戦争映画などでよく見かけるような米軍兵のように筋肉が隆起しており、肌は黒い。もし油なんかを垂らしてやれば、ボディビルダーの完成である。

さて、チップのおかげかどうかわからないが簡単にドラッグの販売元を知ることができたのだ。しかし販売元を知ったものは良いがこれからが重要なのだ。どうやってドラッグを手に入れるかである。堂々とやっているのであればいいのだけど、どこか薄暗い所でやられるのは一番怖い。何が怖いかというと、コレは想像でしかないがどこかの細い道の奥で取引をするとき、金だけを払わされることがあるかもしれないからだ。

もちろん俺の想像でしかないが、そういうことが起こるかもしれないと身構えながら行く必要があるということだ。

カクテルを左手に持ちながら席を立ち、俺は販売元である、偽米軍男に接触を試みた。

「すいません。最近出回っているクスリのことに関心したいんですけど」

タイミングが悪く流れていた曲が終わり、次の曲に入るまでのインターバルに聞いてしまったので沈黙が怖い。

「ああ。お前もこの『ドリーム』が欲しいのか？ 10錠で4000円だ」

男は見た目からは想像することが出来ないほどフレンドリーに返答してくれた。恐怖心が一気に吹き飛んだが、逆にそのフレンドリーさが新たな恐怖を産み俺を包み込む。

それと、ドラッグ知識は学校で教わった程度の俺が思うのだが、ラムネほどの大きさで熟れたトマトのように赤い錠剤が10錠で4000円なんてぼつたりもいいところだろう。それでも欲しいと願う人達は一体何なのだろうか？

しかし、俺は見導部に舞い込んだ今は無き依頼を果たすために、今月の小遣いを全額使い5錠入った2つの小袋とを買おうしよう。

「わかった買った。それで、コレはどんな感じになれるんだ？ アッパーか？」

「いやいや。これは人間が使うものじゃない。植物の肥料さ。人が使った場合はアッパーなんて目じゃないほどハイになれるぜ。だが、

その後の事は承知しないからあしからずってやつだ」

売り方が上手いのだろうか？ 今は人体摂取用で販売すれば薬事法に引っかかるので、建前でも先に植物の肥料だと言う。そして、問題を起こしても俺は何も知らない。全ては自己責任というやつだろつ。

確かにこの手のモノに手を出した奴は次々にクスリを買い続け、金が無くなれば禁断症状というものが出て、事件を起こしたりするというニュースが出てきたことを知っているのでそういうことが言いたいのだろう。

「もしそれ以上に欲しかったらココに来ないで、この住所に来てくれればいくらでも売ってやるよ」

男はポケットからくしゃくしゃになった紙を差し出してくるので、俺は受け取りその紙に書かれている文字を読む。かなり汚い字なので多少解読に時間が掛かったが、こつちに越してきて一月も経っていないのにその場所がわかるわけがない。明日にでも瞳さんにこの場所を教えてもらおう。場所を知っても行くことは絶対に無いけれど。

でも、なんだろう。妙に手馴れているというか、こんな簡単にドリームの販売所を教えてしまつて良いのだろうか？ この住所を警察などにリークしよとする輩もいるだろうし。

「わかつた。それじゃあありがとな」

買った『ドリーム』ともらつた紙をジーンズの左尻ポケットに、売人の妙な立ち振る舞いを心の中にしまい、名前も知らないフレンドリーな売人から離れ、さっきまでいたBARに戻る。

緊張の所為か、口と喉が水分を欲しがっているのでカクテルを一杯に飲み干す。しかし、喉を通り過ぎたのはアルコール分が一切含まれていない100%のオレンジジュースだった。

グラスを返す際にソフトドリンクを差し出したバーテンダーをじつと見つめた後にクラブから撤退する。もしあのバーテンダーが石田だとしたら明日にでも殴つておこう。一杯500円のオレンジシ

ユースなんて尻ポケット内にあるドリーム並みにぼったくりなのだから。

でも、今まで飲んできたオレンジジュースよりも数段美味しかったので、本当に500円なのかもしれない。

撤退した後、あのVIPルームらしき場所にはどのような人がいるのだろうか、帰り道そのことだけを考えていた。

「スミヤン。結局昨日は行ったのかい？　あまり危険な橋は渡って欲しくないんだけどなあ。まだこの街に来て1月も経ってないんだから」

翌日、登校すると真っ先に石田は昨日のことを聞きだしてこようとする。昨日のバーテンダーと比較してもなんら遜色の無い石田。もしかしてアイツは石田本人だったのだろうか？　それにしても依頼をしてきた奴がこうもぬけぬけと言えたものだ。

「新感覚のスクリュードライバーを出したくせに良くそんなこと言えるな」

「は？　一体何の事だいスミヤン？　それよりどうなんだって。『ドリーム』は手に入れたのか？」

カマをかけたはずなのだが、何も反応を示さないということは昨日のは本当に石田ではないのだろうか？　それにしてもあれほどそっくりなのだから一度は対面させてみたいと思う。たぶん片方は死んでしまうかもしれないが。

「手に入れたどころか、売人の住所も手に入れたよ」

くしゃくしゃだった紙は俺の財布の中でもっとくしゃくしゃになっっていたが、まだ住所は解読できる。

その紙を石田が盗ろうとするが、俺はすんで引つ込めまた財布に仕舞い込む。まったく油断も隙もあつたものじゃない。

「おいスミヤン。依頼をあげたんだから結果はちゃんとくれないと」悔しそうに俺を見るが、どうせ演技だろう。目が笑っている。

「お前は昨日俺達に忘れるように行ったんだ。だから依頼なんてな

かったんだ。だから渡すものなんか存在していないさ。もし、情報が欲しいというのだったら、とっておきの情報をくれよ」

石田も知らない情報。と、くれば俺だけが知っている売人の住所。これを教えれば石田がもっているとおきの情報も手に入ると思うが、コレだけは教えられない。教える相手は瞳さんだけなのだから。それにコイツのことだ。住所なんか既に知っているだろう。

「まあ情報は欲しいけど、そっちが理解したとおり依頼放棄なわけだし。それよりもスミヤンはテストまではずっと部活をするのかい？」

と、情報だけが生き甲斐だと思っていた石田は食いついてこなかった。やはり住所なんかは既に知っているとみて間違いないだろう。もしかしたら名前も知っているかもしれない。

「たぶんそうなるんだろうな。あの人はその気だろうし、俺はそれに従うしか道がないだろうしな」

5日頑張れば平均点以上取れるのであればその話に乗らないということはしないし。なんだかんだでここ最近面白いことが訪れているから続けたいと思う。

「そうか。まあスミヤンほどあの人に近づいた人はいないから、スミヤンを観察するのは飽きないし」

どうやら俺は石田の観察対象に入ってしまった。弱みを握られることがなければいいのだが。

「そうそう。お前って合法ドラッグの相場って知ってるか？」

情報屋の石田には愚問かもしれないが、一応ドラッグの相場を聞いてみる。

「そうだなー。10錠2万ぐらいじゃないか？ ドリームはいくらだったんだ？」

10錠4000円が高いと思っていた俺は一体なんだったんだろう。

「10錠で4000円だよ。これでも安いほうだったのか」

「そんなに安かったのか。たぶんTVショッピングとかでよくやつ

てる初回特別価格のなんだろうな。足元を良く見た商売だよ。まったく」

石田は腕を組んで考える。もしかして次からはここに来いよ。って言いながら紙を渡した理由は次から値段を引き上げる理由なのだろうか？ でも、住所に書かれてる場所がクラブよりも遠い奴はどうしているんだろう？ もしかしてあのVIPルームで買っているのだろうか？

「お前だつて人の足元見た商売してるじゃないかよ」

「そんなことないじゃないか。スミヤンにはタダで佐伯嬢の情報を上げたじゃないか。十分優しいよ、俺は」

コイツに何言つても勝てる気がしない。どうして口論で勝てる相手が俺の周りにはいないんだろう。……いた。新井さんがいた。でも彼女とは口論なんかしないだろうから、関係ないか。

「そもさん！」

今日も放課後、いつも通りに部室に入ると、先客である瞳さんがお気に入りの椅子に座りながら叫ぶ。

「かつぱ」

「ぱんちらー！」

「ラツパ」

「パンツァー！」

「アツパー」

「パニツクー！」

「クツパ」

「パチンコー！」

「こつぱ」

「ちよつと待つてくれたまえ。どうしてちゃんと禅問答をしてくれないんだ？ しまいにはしりとりになつてるし、それにしても君は私に恨みでもあるのか？ 『ぱ』で攻めるなんて汚いにもほどがあるぞ」

黒い髪をなびかせながら彼女は俺に向かってきてポカポカと胸板を叩く。痛くはないのだが、どうしようもなくうざったい。

「最初から禅問答する気がないから俺は『河童』って言ったんです。それでも続ける瞳さんも瞳さんじゃないですか。『ぱ』攻めは『ぶ』攻めより鬼畜じゃないんで汚くないです。普通です」

もし『ぶ』で責められたりしたら、俺だって相手の事を恨むだろう。だって他の文字より答えられるものなんて少ないわけだし。むしろ、公式ルールで『ぶ』攻めは禁止してもらいたい。

「さて。お遊びはここまでにして、昨日の成果を聞こうじゃないか。ここで失敗報告をしてみる。大輔は今日付けで部長から平部員に降格だからな。そのところを考えて報告するようにな」

胸を叩き続けていた瞳さんは元いたお気に入り椅子ではなく、部屋の奥にある椅子に腰掛ける。俺はずっと立ち続けているが。

そして、なにがなんでも部員数は減らしたくないのだろう。その結果が平部員への降格。それだけは御免こうむりたい。

「もちろん収穫はありましたよ。ここに『ドリーム』もあるし、売人の住所も入手した。でもこれを手に入れてどうするんですか？ 元はといえば、この学校内でこのドラッグを使った生徒を炙り出すためでもなくただ、どんなドラッグが出回っているかを調べるだけだったし」

赤い錠剤が入った小袋を手渡す。すると、早速その小袋の封を開け錠剤を手のひらに1錠だけ乗せる。これから観察でもするのだろうか？

「生徒を炙り出すのはかなり簡単な話さ。それこそ私が校内をただ歩いていけば良いんだから。でもそれじゃあ見導部としての活動じゃない。私だけが動いているだけなんだから。でも、大輔が部長になってくれたおかげで依頼が入るようになったんだ。そしてその部長が危険を犯してもドラッグを購入してきたおかげでどんなクスリを使っているかを知ることができた」

手のひらの乗せた錠剤を右手の親指と人差し指でつまみ俺に見せ

付ける。

たしかに、この学校で使われているかもしれないドラッグを知ることができたのは収穫ではない。では、これからはどうするのだろうか？ ただクスリを手に入れただけで終わり。とするのはきりが悪いといふかなんというか。

「君は情報屋が出した依頼内容を忘れたのかい？ クスリを販売していると言うことの裏を取れと言われたのだよ。だったら依頼内容は達成したじゃないか。それにこの情報を持っているからといって君や私が何かできると思っているのか？ だったら君は自惚れている。一介の高校生でしかない私達に出来ることと言えば、このクスリを使わないことだ。それしか出来ない」

瞳さんは口を閉じた。

確かに俺はどこか自惚れていたのかもしれない。何でも見透かせることが出来る瞳さんがいればどんな事件も解決できると思っていた。しかし、そうではなかったのだ。

「悪いがまだ続きがあるからな。入手したクスリのことを警察にリークしたとしよう。もちろん売人や所持者、使用者は一斉検挙されるだろう。このことは容易に想像できる。しかし、またしばらくすれば新たなドラッグが出回り、またしても使用者が増えるだろう。もはやドラッグ業界は誰にも止めることが出来ない永久機関と化してしまっているのだよ」

ここで彼女の言葉は止まる。

「だったら俺をどうしてあそこに行かせたのだろう？ 意味がないのだったら行く必要はないわけだし、クスリを買う必要だってなかったんだ。」

結局、俺たち見導部はいつたい何のために存在しているのであるう。ほかの部だったら大会や発表会のようなことをすることが出来る。しかし、依頼を解決するしかない。常に後手でしか動けないこの部の存在意義とはなんなのだろう。

「つまりとこころ私の自己満足でしかないわけだよ。失望したかい？

こんな部活なんか退部したいかい？ 来る者は拒まず、去る者は追わず。だからねこの部は。もちろん私も同じだ」

「別に失望なんてしないでしょ。ただ、それだと虚しくなってるのかなって。誰からも評価されることなく過ごすんだ。少しくらいは評価されたいって気持ちになるじゃないですか」

人間誰しも一度は評価されたいと思ったことはあるだろう。もちろん俺もそう思ったことはある。でも俺が思っていたその評価されたい事柄で評価されることは今の俺には難しいが。

「そんなこと言われなくなつて私だつて評価されたいさ！ 全国模試で1位になつて学校中から尊敬の眼差しで見つめられたいさ！ それなのに、皆が私のことをチートだのなんだのと！ だからもう私は評価されたいと願わない。だからこんなひどい環境でも一人で生きていけるんだ！」

彼女は叫びながら机を何度も叩く。たぶん怒鳴り声と机を叩いた激しい音は閉まつているドアを貫通して廊下にも響き渡っているだろう。

そして、ドラッグを小袋ごと投げる。それは俺がしっかりとキヤツチしたが。

人の心を見透かす瞳さんの心の声を初めて聞いたような気がする。今まで叫ぶことは多々あったが、こんな大声で怒鳴つたことは1度もなかった。それほど彼女も不満などを溜め込んでいたんだ。それに気付かずにあれこれ余計な事を言つて俺はどうしようもない人間だ。

「こんなことを喚いた私を君はここに置いていくのか？ 人と接するのが怖くなっている私を君まで置いていくのか？ もうそんなのだつたら今すぐに出て行つてくれ！」

もう自棄を起こしているとしたか思えないほど荒れている彼女は、机の上を歩き俺に向かって大股で歩いてくる。あの机の上は不安定というか、あそこに乗るのは結構危ないのに良く普通に歩けたものだ。

「この状況で置いて行けるわけないでしょうよ。それに誰がここを出て行くって言うんですか？ 俺はまだ見導部の部長として君臨し続けますよ」

歩み寄ってくる彼女を身体で抱き止める。俺もこういう風に荒れていた時があった。でも、その時は俺の事をかまってくれる人はいなかった。あの時は人のぬくもりが欲しかったんだ。だから俺は、たぶんその時と同じであろう瞳さんを抱きしめた。人は人のぬくもりを感じると落ち着くことが出来るんだろう。だから俺は実践する。女性特有の香りというか、嗅いだことがないものが鼻腔をくすぐる。そして彼女の身長が平均よりも高い分、顔が横にあるのもものすごく緊張する。それと胸の膨らみがつぶれている感触も感じる。自称88cmは伊達じゃないというか。とにかく緊張する。結論としてはこんな状況は今すぐにも解放されたい。

「……君は弱っている女性にはいつもこんなことをしているのか？ 妙に慣れているような気がするのだが、私の気のせいかな？」

この状況を脱出したいのだが、瞳さんはそれを阻止するためではないと思うけど、背中に手を回してきつく抱きしめてくる。せめてこの状況で誰かが入ってくるといっただけはあつてほしくない。誤解されるというのが嫌というわけではない。ただ恥ずかしいのだ。

「そんなことないですよ。今まで彼女なんていたことないし」

「知ってる。大輔の記憶を見たがそんな甘い関係になった相手なんか誰もいなかったな」

知っているなら何故聞いた。それに人の過去を見るのは色々やめてもらいたい。秘密にしたい恥ずかしいことが沢山ありすぎるのだから。

「たった今恥ずかしいことをしてる奴が思う台詞ではないな。そろそろ解放してはくれないか？ このままで話していたいならこのままでも良いが」

いつの間にか後ろに回っていた腕は下りていたので、その一言を聞いて俺は瞳さんを解放した。彼女の頬が若干赤くなっていたのは

俺の自惚れだということにしておこう。俺の顔は絶対に赤くなっているけど。

「さて。今日はここまでにしておこう。私も恥ずかしいことをしてしまった。痛み分けということとで今日のことはお互い水に流すという事で良いよな？」

俺に決定権がないことはわかってるので頷く。ここで否定でもしてみよう。どんな過去が学校中に広がるかわかったものじゃない。「了解です。そんじゃ先に失礼します」

グラウンドで夕日を浴びながら一生懸命に活動しているサッカー部を見下ろしながら俺は帰宅した。

帰宅してから、平均点以上をとるために勉強をしようと試みるが、どうも集中しきれない。瞳さんのこともあるのだが、それ以上に渡すのを忘れてしまい仕方なく持ち帰った錠剤が目の前になるので気になってしょうがない。

いったいどんな作用があるのかが気になる。あの男いわく、アツパーなんか目じゃないほどの効果らしい。しかし、中毒性の高いクスリだとしたら使ったら最後、二度とクスリなしの世界に戻ることには出来ないだろう。

不意に携帯電話が震える。画面を見ると瞳さんからの電話だった。「もしもし。大輔。君は今クスリを持っているな？ それとももう使ってしまったか？」

電話越しでも人の考えを読むことが出来るのか、俺が電話に出る前のことを知られてしまった。

「いや。クスリは目の前にあるだけ。それより依頼でも入ったんですか？」

「なんだ。大輔も人の言いたいことがわかるようになってきたのか。依頼が入ったさ。君にしか達成できない依頼がね。それで、ソレを服用しようとしたわけだね。いいかい。絶対に使っては駄目だ。たったいま情報屋にクスリの事を詳しく聞いたが、それに含まれてい

るのは今まで出回っていたクスリよりもかなりの中毒性があるようだ。わかったな。絶対だぞ」

依頼。いったいどんな依頼だろう。そして、それほどにまで強いクスリを使っているのだから、学校で使っている奴なんか簡単に見つけ出すことが出来るのではないだろうか？

「おい。なんだこの沈黙は。本当に使おうとしていたわけだな。君というやつは本当に無謀という言葉がお似合いだ。もし使ったらその時点で部長役を退いて退部させてやるからな」

考えながら電話していたのだが、俺の考えていたことがわからないのか？

「瞳さん。もしかして電話越しだと人の考えてることがわからない？」

「ああ。大輔が今何を考えているか。ソレはわからない。ただ、それがどうかしたかい？」

「どうやら本当に俺の考えは知られていないようだ。だからといってなにかが出来るというわけではないし、俺が生徒を炙り出そうとすれば石田や瞳さんに勘付かれておしまいだろう。」

「いや、なんでもありません。それで依頼は何をすればいいんですかい？」

「次の休日に君と遊びたいそうだ。テスト前だというのに余裕な奴だね。まったく。その依頼を受ける側はそれどころではないのに」

本当に困る。今日だって勉強なんて出来そうにないのに。テストが終わってからもいいのに、どうして今週末なのだろう。それほど急な用事があるのだろうか？ とりあえず、その依頼主とは仲良く出来なさそうである。

「わかりました。とりあえず、依頼はこなしますよ。本当に5日間みっちり勉強を教えてもらうかもしれないけどそのときはよろしくお願いします」

俺はそう言い、電話を切った。

さて。今日はもう集中力のかけらもない。寝るだけにしよう。

それにしても今日は瞳さんの弱さというか、心の奥底に触れた気がする。瞳さんも人間だ。か弱い少女なのだ。それを忘れないでくれからも接していこう。

翌日の放課後、いつもと変わらない瞳さんとくだらない遊びをしているとドアがノックされて聴き覚えがある声が鼓膜を揺らす。

「はい。新井さん。どうぞ入ってきて良いよ」

合法ロリの二つ名を持つ彼女は新しい依頼を運んできたのか、またこの見導部にやってきた。

「大輔。私は本当に君をクビにするよ？ 言っておくけど私の顔は3度までだが、私の顔は2度までだからな。次はないと思え」

本当にクビにされかねないので、これからはなるべくそういうことを考えるのはよしておこう。お互いに困ることなので。

「それで、今日はどうしたんだ？ 先日耕した畑は何者かの手によって荒らされていたので、また耕してくれとか？」

「いや。そういうことじゃないし、それ以前に畑を荒らす人なんてまずいないよ。今日も男手が欲しくて澄野君なら手伝ってくれると思っただから」

確かにこの学校に畑を荒らすという馬鹿げたことをしそうな奴はいないだろう。そもそもこの学校に畑があることを知っている人がどれほどいるというのか。

「わかった。それじゃ今日も行ってきますけど、今日も応対ちゃんとやってくださいよ」

前の園芸部の助っ人のときは誰も来なかったというが、本当の所は瞳さんしかわからないので確認のしようがない。邪魔な椅子の上でヒラヒラと手を振りながら俺たちを見送った。

今日は新しく作る花壇のために必要なレンガを運んで組み立てるらしい。

「ごめんね。今回もこんな重労働をお願いしちゃって」

「大丈夫だって。それに男が入ってこないんだったら仕方ないし、

俺達は来た依頼をこなすためにあるんだ。頭脳関係は瞳さん。労働関係は俺って役割分担もしてあるし」

と、言っても今まで来た依頼は全部で3件。そのうち破棄された依頼は1件。つまり依頼はすべて新井さんがくれたものだけなのだ。「こういいうお願い以外にどんな依頼が入ってるの？ ちよつと気になるなあ」

目を輝かせて彼女は言う。本当に中学生。いや、小学生に見えてしまう。失礼なのだけど、彼女の仕草がそう思わせてしまうのだから仕方ない。

本当のことを言っても良いのだろうか？ 彼女が頼む依頼しか入ってきていないことを。それとものりくらりかわしたほうが良いのだろうか？ でもそんなのりくらりかわしたところで近い将来ばれてしまいかもしれないんだ。だったら正直に言ったほうが良いだろう。

「まあ、はつきり言うとな新井さんの依頼しか入ってきてないんだ。やっぱり依頼を頼むってことは人に自分の弱みを曝け出すのと同じことだからね」

彼女の頼みごとは部活での助っ人依頼なので、彼女自身の弱みなどにつながるというわけではないので気軽に相談できるが、個人的なことは相談しにくいだろう。

「確かに人に自分の弱みを教えるのは気が引けるって言うか、なんか嫌だね」

そう。彼女のそういう考えが普通なのだ。だからそういう弱みを見られてしまう瞳さんは疎外されてしまうのだ。

「まあそういうことだ。それで、このレンガはどういう風に組み立てればいいんだ？」

「うーんとね。隙間がないように土台を作ってレンガ同士をモルタルっていうセメントみたいなもので接着させていけば大丈夫。その流れで2段、3段と重ねていってくれば良いよ」

彼女の指示通りに動いたおかげか作業はサクサク進み、失敗する

ことなく花壇は完成した。

「後はモルタルが固まるのを待つだけだから今日は終わりだよ。今日もありがとね」

「いやいや。俺としても貴重な経験をさせてもらったし面白かったよ。また何か困ったことがあったら依頼しに来てね。そうだ。いちいち部室に来るのも面倒だと思うから俺のアドレス教えておくね。そっちのほうが楽だろうし」

二つ折りの携帯電話を開き赤外線を用いてのアドレス交換をした。これで電話帳に東京に来て3人目のアドレスを登録した。今登録したあるアドレスは4件なのは俺だけの秘密である。

花壇の製作も終わり部室に戻ると、今日は奥の机で瞳さんは仮眠をとっていた。

PCの電源がついたままなのであろう。ディスプレイから出る光によつて瞳さんの髪が光っている。

彼女がPCを使う姿は今まで見たことがなかったので、どんなものを調べているのかが気になる。しかし、それはプライバシーの侵害になるのでこの好奇心は抑えておかなければいけない。

「君は本当に変態だね。私のことを知りたがるなんて。好奇心は猫をも殺すつていう慣用語があるだろう。それと一緒に、大輔が画面に出ているものを見た瞬間に私は君の恥ずかしい過去をばら撒き、君を社会的に殺すことが出来るんだからね」

目を瞑りながら言うことではない。もちろん寝言ではないことはわかっている。

「勘弁してくださいよ。それに変態つてあんまりじゃないですか」
「それとね、つい4時間前に思ったんだが、その敬語モドキはやめてくれないか。昨日あんなことをしたんだ。お互いに対等であるべきだと私は思う」

4時間前つて。昼休みにそんなことを考えていたのかこの人は。

「……まあいいけどさ。それより、俺がいない間誰がこの教室に入ってきた？」

敬語が苦手な俺としては堅苦しい言葉を使わないですむことに喜んだ。将来、敬語で苦労するとは思うが、それは追々覚えていくことにしよう。

「誰も来ていないと思うが。なんだ？ 私の寝顔を独占しようとしているのか？ やはり大輔は変態だなあ」

最後の変態と言った時の語尾が上がっていた。ついでに頬も上がっている。何が嬉しいんだか？

本当に寝ていたと思ったので、そんな答えが返ってくると思っていなかった。そして、また変態つて。おれは一体何回変態と呼ばれているのだろう。今回は俺の過失というわけではないし。

「ちゃんと応対してって言ったでしょう。それなのに寝てるってどうなのさ」

「誰も来なかったんだ。だったらその暇な時間ぐらいは私の好きにさせてくれよ」

寝てたら誰が来てかわからないだろうさ。まあ、新井さんや石田以外に依頼を持ち運んでくるような人はいないだろうけど。

「そうそう。忘れてはいないと思うが今週末。というより明日、君への依頼が入っている。絶対に忘れてはいけないからな」

それなのだが、まだ依頼があるとした聞かされていないので、何時にどこに行けば良いのか。まったくもってわからない状態だ。

「11:00に駅前で待つてると言っていたよ。そこで依頼内容等を話すと思うから、大輔はその時間に間に合うように行けば良いと思うよ」

「それにしても、どうしてそんな回りくどいことをするんだ？ 依頼内容とかも全部瞳さんに話せば良いのに」

そこだけが疑問なのだ。なぜその依頼主は瞳さんを通して俺に依頼を頼んだのだろうか？ その場所に俺がいなかったとしても、依頼内容も教えてくれれば良いのに。

「別にそんなことを気にしたって大輔には関係無くはないがどうでも良いことじゃないか。それともなんだ？ 依頼主のすべてを知っ

ていなければ依頼は受けないというのか？」

なんでだろう。妙に瞳さんが食ってかかってくる。人のことに関してあまり興味がなさそうなのだと思っていたがそうではないのだろうか？

「そうじゃないんだ大輔。私は人に興味が無いというわけではなく、君以外の人が私に興味が無いんだ。そこだけは間違えるなよ」

人差し指で額を突きながらそう言う。爪が伸びているのか、結構痛かった。

「そうだったな。それにしても依頼が来ないとやる事が無くて本当に暇だよな」

「それだったら勉強をすればいいじゃないか。ここに全国模試1位の模範がいるんだ。なんでも教わることが出来るんだぞ」

確かにここで勉強でもなんでもすれば時間はなくなっていくが、どうしたものか。勉強というものは頑張ろうと思ってもなかなか出来ないものだ。

「それはたんに君の集中力の無さが原因だろ。まったく。それで、どこからがわからないんだ？下校時間までみっちり勉強をするようにではないか」

乗り気になつた瞳さんの所為で本当に下校時間まで勉強をさせられた。そのうえ、次会うまでの課題として英単語を覚えることになつてしまったので、必死に覚えざるを得なかった。明日は俺宛に依頼が入っているから、それまでにしっかりと覚えておきたい。日曜日ぐらいはゆっくりと休みたいから。

交流

瞳さんに言われたとおり、11:00に駅前に着いたが、1つだけ聞くことを忘れていたことがあった。依頼主がどんな格好をしているかということ。

もちろん、依頼主は俺のことを知っているの、俺がここに来れば相手の方から声をかけてくるに違いないが、こちらとしても心構えというものが必要なのだ。急に来られては困る。

「やあ。大輔。奇遇だな」

聞きなれた声を聞き振り向くと、白いワンピースに淡い水色のカーディガンを着た瞳さんがいた。視力の良い彼女だからアクセントとしてなのだろう。黒縁のメガネをかけている。さすがに依頼主ではないだろう。依頼主でない事を祈りたい。

「奇遇って瞳さんがここにくれば依頼主が来るって言ったんじゃないか」

「ああ。だからだよ。私は君に声をかけた。君が何も知らない依頼主としてね」

これは騙されたと思っていいのだろうか？　というか普通に騙された。

「騙したなんて。大輔が勝手に想像しただけじゃないか。私は待ち合わせ場所と時間を教えた。それに君が来た。これまでで何か騙したりする要素があるかい？」

もう、何を言っても俺には何も覆せないの、黙るしかない。結局は瞳さんの方が1枚も2枚も上手だというのは変わらないのだから。

「それで、今日は何をすればいいんですか？　いつもと雰囲気の違い依頼主さん。こっちとしては誰かさんの所為で勉強に力を入れなきゃいけないんですけどね」

今日は長い髪を1つに束ねた、いわゆるポニーテールという髪型

をしている。白いうなじが歩きたび見える。やっぱりこの人は綺麗だと思う。

「そうだね。その誰かさんは君に対してきつく当たっているようだが、私には関係ないことだね。今日の私は依頼主なのだし。今日は私の隣にいてくれれば良いよ」

今日も1日この人に振り回されるのかと思うとテンションは下がるが、今まで見たことが無かった彼女の私服姿で下がったテンションはいつも通りに戻った。我ながら現金というかなんと言うか。

「そうか。大輔にこんな格好を見せるのは失敗したのかもしれないな。次があるかどうかわからないが、次はもつと露出度を抑えた服にしよう」

彼女も彼女でいつもと比べて若干だが語尾のイントネーションが上がっているのを聞いて、今は楽しんでいるように見える。帰り際がどうなるか若干不安だが。

「そんな格好していたら男なら誰でもテンション上がるさ。それに加えて俺はその人の隣を歩くことが出来るんだ。今日1日ぐらいは幸せ気分だろうさ」

「やっぱり君は変態だな。今ここで依頼破棄したいが、今はやめておこう。日が暮れるぐらいになったらたぶん面白いことが待っているだろうから」

最後に、なにか不吉なことが聞こえたのだが、何も聞かなかったことにしよう。どうせ日が暮れたらわかることなんだ。今だけは幸せな気分を満喫することだけに専念しよう。

まず、最初に訪れたのは映画館。いま流行の恋愛映画を見るのかと思っていると、その予想は裏切られ、激しい銃撃戦が売りの戦争映画だった。まあ俺としては中々面白かったが。瞳さんに感想を聞くと、「人はあんなにも飛ぶことが出来るのか？」と驚いていたし、手が震えていたので、たぶん俺の頭の中をみて俺の好みを選んでくれたみたいだ。映画を見ているときも恐怖の所為だろうか、何回も俺の手を握ってきたわけだし。

そんな無茶なことはしないで良いのにと思ったが「そんなことは無い！ 私だつて興味があつたんだ。自惚れるのもいい加減にしろ」と怒られてしまった。

映画を見終わりに、時間が時間だったので近くのファミレスで遅めの昼食をとることにした。

普段の瞳さんがどれほど食べているのかが気になるが、そんなことを考えればまた変態と呼ばれるだろうから、そう言うことは考えないでおこう。でも、こんなことを考えているわけだから瞳さんには伝わっている。ものすごい形相で睨んでいる。

「それで、今日は何でこんなことをしたの？」

「そんなことは別に良いじゃないか。まあ理由を付けるとしたらいつも依頼をこなしている部下への配慮として息抜きをさせてやろうと思った。これで良いか？」

息抜きだったら、家でゴロゴロしているのが一番なのだが。こつやつて週末に誰かと出かけるということが今まで少なかったので、何をして良いのかを考えてしまう。

「そうか。私がしていることは大輔にとっては無駄なことだったのか」

そう言つて、瞳さんの声のトーンが明らかに下がった。本当のことなのだから仕方ないが、今日は瞳さんと行動を共にするしかないので今こういう風にテンションを下げられてしまうのは困る。

「ふふ。冗談だ。大輔の週末の過ごし方はわかっている。ただ、こういう風に羽を伸ばすのは良いことだぞ」

まあ、まだ映画しか見ていないが嫌な思いはしていないし、むしろ楽しいことだらけなので息抜きとしては良いのだろう。

食事をしているところを見て初めてわかったことがあり、瞳さんの口はそんなに大きくないことと口の中に頬張る癖があることがわかった。あの紅い唇は大きく開けられないので、食べ物を小さく切り分けてから口がパンパンになるほどためてから咀嚼する。ハムスターのような感じで可愛い。

「そんな可愛いとか言うんじゃない。恥ずかしいじゃないか！」

こんな風に俺の言葉に反応して表情を変える瞳さんはいつも以上に魅力的に見える。そして、こんな事を言う姿も可愛い。結局は可愛いのだこの人は。ただ、人間版さとりとして恐れられている所為で人々から疎外され続けてきた人だったのだ。

「君は私のことを考えすぎではないかい？ 相手の考えていることがわかる相手の前で、その人のことを考えるなんて愚策にもほどがあるぞ」

「いや。だって仕方ないじゃないか。今日は本当に魅力的なんだから。もし学校でもこんなに魅力的だったらつい変態的な道に走りそうで怖いよ」

まあそんなことをすれば部はクビになり、それとは別に社会的に殺されてしまುದらう。だから実際にはやらない。やれないのだから。

「そうだな。今日ぐらいは大目にみてやろう。だが、次はたぶんないからな」

瞳さんの顔は2度までだったのが3度、4度までに増えた。これは好印象だと思ってもいいのだろう。

「さて。食べ終わったことだし次はどこに行こうかね」

今日の依頼主はようやくやくハンバーグを食べ終わり一息ついたところでそんなことを言う。今日の予定はすべて目の前にいる彼女の隣にいることなのだが。

「だから隣にいるのは依頼だ。だからといって行きたい場所を決めているわけではない。大輔はどこに行きたい？」

急にどこと言われて、ぱっと出てくるほどこの町で遊んでいるわけではないのでそう言われても困る。こういうとき、普段から遊んでいそうな石田みたいな人がいればそいつの意見に従うのだが。

「大輔が決めない以上、ここは私が決めざるを得ないな。私が依頼主だしな」

会計を済ませ、瞳さんに手を引っ張られ街を走った。当然周りの

人たちには変な人だと思われるがそんなものは知ったことじゃない。結局近くのゲーセンでクレインゲームなどを楽しみ、時間を費やし二人での思い出を作った。まあ楽しいと思えたし、彼女もそう思ってくれているだろう。と、俺は思っていた。

「今日は楽しかった。依頼も終わった。なら、今からは勉強に専念しなきゃいけないよな？」

楽しい時間を満喫した今、地獄のような時間が待っているとは想像もしていなかった。

そして今は俺の部屋。依頼も終わり瞳さんは帰るだろうと思っていたが、俺の家が気になると言うので案内し、そこで発した言葉が「それでは昨日出した課題はちゃんと終わっているだろうな？」と、来たものだ。地獄が始まってしまった。

今日1日依頼でつぶれると思っていたので、出された課題は寝る前にみつちりと頭に叩き込んだが、今ここでテストをしてみれば8割ぐらいしか出来ないだろう。俺の学力は一夜漬けをしてもそれぐらいなのだ。

「仕方無い。確かに努力した痕跡があるようだからそれに免じてテストをするようなことはしないけど、明日は日曜日なんだ。今日はみつちりとそのスポンジの頭に叩き込んであげるよ」

なんだろう。彼女は今日泊まるつもりなのだろう？ 途中で帰ってはくれないのだろうか？

「残念だが、途中で帰っても良いがそれでは君のためにはならないと思うんだ。それにもう外は暗くなっている。そんな中帰らせるのはあんまりだとは思わないか？」

「いやいや。誰も一人で帰れとは言わないさ。当然家まで送っていいよ」

彼女の家がどこにあるかなんて知らないが、さすがに夜道を女性一人で帰らせるわけには行かない。コレは男として当然のことだろう。

「今から帰ったら大輔がこの家に着くのはかなり遅くなってしま

だから今日はもうここに泊まることにした。何か問題でもあるかね？」

いや。男と女がひとつ屋根の下にいるんだ。何かあってもおかしくないじゃないか。

「大丈夫。それはないと思っっているんでね。第一、大輔にそんな度胸あるとは思ってないし」

そうもきっぱりと言われると心を抉られるというか、嫌な思いしかしない。

「はいはい。どうせ俺には瞳さんを襲うような度胸はありませんよ。ちよつと飲み物とつて来るんで静かにしててくださいよ」

部屋を出て冷蔵庫を開けるとお茶などの飲み物はなくて、缶チューハイが2本しか入っていなかった。親が帰って来ないので自由な食生活をしている高校生の冷蔵庫の中身にしてはあまりにもひどい状態だった。ソフトドリンクぐらいはせめてあると思っただけだけど、それしかないのだからそれを持っていく。怒られても仕方無い。「瞳さん。今チューハイしかないんだけど、良い？ 未成年だろうけど」

「当たり前だ。私は大輔と同じ17歳だ！ それで、なんで君の冷蔵庫には酒しかないんだ？ そしてこれから勉強をするんだぞ。わかってるのか？」

だってそれしかないんだもん。買いに行っても良いんだが、ここからはいちばん近くて10分ほど離れた場所にしか飲み物は置いていない。東京と言ってもここはかなり田舎なのだ。

「仕方が無い。今日はコレで我慢するが、君はこれから学習する側だから飲んで駄目だぞ。私は勉強を教える側だから良いんだ」

ブルタブを引き、口を開け、ブドウ味のチューハイを一口。缶をテーブルに置いてきつちり30秒後、彼女は仰向けに倒れた。幸い、後頭部にはクッションがあったので床にぶつけることは無かったのだ、大事には至らなかつたが寝てしまったのだ。

このあと、どうしたものか。というか、こんなにも酒に弱いのに

どうして飲んだんだろう？弱いということを知っているのだったら断れば良いものを。

とりあえず、彼女をベッドで寝かせて俺は新しく出た課題をこなすことにする。明日の朝からどうせみっちり勉強を教わるのだから、予習をしておかないと何を言われるのかわかったものじゃない。

今日は英単語とは別に数学の課題も出されていた。数学は他の教科と比べて理解は出来ていると思うが、瞳さんに言わせれば可も無く不可も無くというのだからもつと勉強しなければならない。飲みかけのチューハイを一気に流し込み、勉強を再開した。彼女の飲みかけなのだろうか？いつもと同じものを飲んだのだが、いつもとは味が違うような気がした。

時間が1時を回ったぐらいにようやく出された課題の予習と今までの復習が終わった。寝る場所だが、親父のベッドで寝れば良いのでそこで寝る前に、明日の朝飯等の食材を買いに行かなければならない。今の冷蔵庫の中身では明日1日何も食わないで過ごす羽目になってしまふのだから。24時間営業のスーパー目指して自転車で跨いでペダルを漕ぎ、進んだ。こんな時間でも食材は結構残っていて、店の売り上げが気になるところだが俺は買いたいものだけを買って帰宅する。

一度部屋に戻って、瞳さんを観察する。やっぱり綺麗で外見だけだったら他の女性を圧倒出来るほどの美貌の持ち主だ。そして、寝ている今でしか触る事が出来ないが、いつまでも触っていたいと思えるほど手触りの良い長く伸びた黒い髪。そんな彼女は今俺のベッドで寝ている。まあ文字通り寝ているだけなのだが、ちょっとした優越感を感じる。

それにしても今日1日で彼女の知らなかったことが沢山知った気がする。だが、俺が知ったことが彼女の何%に相当するのかわからないが、他の人が知らないことを知るといっては気分が良くなる。まあ、彼女が俺のことをなんかをどうせただの部下だと思っているに違いないが、それでも俺は彼女の横にいてこんなにも楽し

い日々を送れているのだからそれはそれで良いと思う。俺が変なことをしてこの関係が狂ってしまうことは避けておきたい。

そろそろ俺も寝るとしよう。明日は今日よりも地獄の時間が待っているのだから。

何か香ばしい匂いが空気中を漂い鼻腔を突き抜ける。肉を焼いている匂いだ。とまだ覚醒しきっていない頭がそれを認知する。一体誰だろう？俺はまだ寝ているし、親父が帰ってきたのだろうか？

連絡もよこさないで急に帰ってくるなんて酷いと言いたいようが無い。

「おはよう。親父。日本に来たなら連絡ぐらいよこせよ。まったく誰が親父だ！私はそんなに男に見えるのか？言っておくが服装の所為だったらそれは君の所為だからな」

瞳さんが俺の赤と白のチェック柄エプロンを付けて、フライパンとフライ返しを手にして台所に立っていた。そして、何故か俺の服も着ていた。俺が着ているシャツを使っているので、腕の部分は何回も折って捲くついているので袖口が妙に厚くなっているし、丈も合っていないのでまだ小さな子供が親の服を着ているような格好だ。少し可愛い。

そして、もう男として惨めというか悔しいというか、ジーンズだけはちゃんと丈が合っているのだ。コレはちょっといただけないというかなんというか。

「ちよっとお風呂を借りたよ。ついでに君の服もね。それとまた変なことを考えたね。罰として課題を増やすことにするよ」

「変なことって。確かに変なことは考えたけどさ、それで課題を増やすのは勘弁してくれよ」

今日は一体どれだけの時間休めるのだろう。それだけが不安になつてくる。

それより、瞳さんのエプロン姿が妙にしつかり来るといふか、似

合っているというか。やっぱり彼女ぐらいの人だと、何でも着こなしてしまふのだろうか？

「私が料理なんかしないと思っているのか？ だったらそれは訂正してもらおう。私は君より包丁を握っている時間が長いと断言できるよ」

「はいはい。今日の朝飯は一体なんなんだ？」

「大輔が献立を考えたものをそのまま再現したよ。寝ている人の頭の中も覗けるからね。だが、冷蔵庫にベーコンとハムと卵しかないんだ。誰だって簡単に思いつくさ」

どこまで彼女の能力は使い勝手が良いのだろうか。そのような能力を使ってデメリットになるようなこと。他人から疎外される。ぐらしいか思いつくことがない。ぐらい。とは言うが、それでも疎外されれば悲しいし、自分の存在意義すら失うだろう。瞳さんもこの間は不満を投げかけてくれたし。

「デメリットだらけさ。大輔と会った次の日に視たり聞いたりする相手を選ぶくらいさせてくれと言ったが、本当は選ぶことなんかできないのさ。外に出れば人々の考えていることが全て聞こえてくる。君は想像できるかい？ 騒音だらけの中で生活する苦しさを。意識して消せることができない騒音の中での生活を」

良い匂いを醸し出しているベーコンエッグを、こんがりときつね色に焼けた食パン2枚を皿に乗せて運びながら彼女はそう言った。それでは昨日は無理をして街に出たというのだろうか？ もしそうだとしたら、瞳さんには申し訳ないことをした。

「君がどうして謝るんだい？ 大輔を誘ったのは私のほうだぞ。それに昨日は楽しかったし私は満足している。君が謝る要素なんて一つもない」

彼女も自分の分の食事を運び終えたので朝食をとる。

「いや。そうやって瞳さんは言うけどさ、それを知っていたら少しでも人が少ないところにも行けたじゃないか」

「私がそうしたかったと言っているんだ。それともなにか？ 大輔

は私の行動に口出しをするのかい？」

彼女の癖で口の中にモノが入っている時間が長いので、言葉と言葉の間が長い。それにしても可愛い食べ方だ。

「また、可愛いと言う！ 私としては可愛いより綺麗と呼ばれたほうが好きなんだがな。それとな、1回だけこの能力が弱まったことがあるんだ」

顔を真っ赤にして怒る。最近、この怒っている姿でさえ可愛いと思えるようになってきた俺はどうかしてしまったのだろうか。

「どうして弱まったんだ？ 詳しく聞きたい」

もし、また同じようなことが起こり、人の考えていることがわかるという呪縛みたいなものから少しでも解放できれば良いのだが。

「それを言うのは恥ずかしい。だから言わない。でもそれが最良な解決策だとは思わないから、あまりしたくないんだ。それより、私を酒で寝かせた後ちゃんと勉強したんだろうね？ 私の寝顔をずっと眺めていた。と言うのだったら今日は1日中勉強を見ることにするよ」

「大丈夫だ。寝顔は少し見たぐらいだし、勉強はちゃんとした。勉強しなかったら地獄が待っているだろうと思ったからな」

寝顔を見たということはどうせばれることだし、どうせ記憶を覗かれるので嘘をついてもすぐにはばれてしまうので、正直に話す。瞳さんには嘘なんてつけないのだから。

「大輔も私のことを良くわかってきているな。そうだ、嘘なんかついてみる。すぐにその嘘を暴いて罰を与えよう」

こんなことを言われるのだ。嘘なんかつけたものじゃない。

朝食を終えた俺たちは俺の部屋に戻り俺の勉強会を再開した。

ちゃんと予習をしたおかげで無茶な量の課題を出されることはなかったが、それでも1日で覚える量としては多い。だが、瞳さんのおかげでいつもの自己学習よりも多くの量を頭に叩き込めることが出来た。

「さて、一緒に行こうか」

「いやいや。大輔はそのまま勉強してれば良いよ。私は一人で帰れないほど子供でもないしね」

勉強も終わり、時間が時間。というわけでもないが、女性一人で帰らせるのは男としてどうかと思い、送ろうとするがそれを断られてしまった。昨日の口ぶりではここから遠くの場所にあると思ったのだが。

「いや、遠くはないよ。決して遠いというわけではない。だから心配しなくて良い」

「心配しなくて良い。って、そんなこと言われても心配しちゃうものは仕方ないことだよ。それこそ心配するなって言うほうがおかしいだろ」

こういう場面で女性のことを心配しない男は人じゃないといっても良いだろう。俺はそう思っている。

「わかったよ。そこまで言うんだったら付いてくるといいさ」

そう言い、彼女は家を出る。それに続いて俺も家を出る。

「ここが私の家だよ。だから付いてこなくて良いって言ったのに」
彼女は右隣の家の前で立ち止まっている。まさか今まで隣だったのに俺は気付かなかったのだろうか？ それにしても今の瞳さんは呆れながらも恥ずかしそうな顔をしている。

「……そうだな。この距離だったら心配するほうがおかしいな。でもそれだったら隣だって言えば良かったのに」

「別にいいだろ。それともなんだ？ 大輔は私のことをなんでも知っていないければ気が済まないと言うのか？」

そういうわけではないけど、家がどこにあるかぐらいを知ったつても、それでなにができるというのだろうか？ もちろん俺には何も出来ないが。

それよりも、集合住宅の廊下でこんなに大声を出しているんだ。他の住居者には俺たちの痴話喧嘩として丸聞こえだろう。

「本当に君と話をしているとペースを乱されてばかりだよ。どうす

る？ 今日私の家で勉強でもするかい？ 私としては一向に構わないが」

俺としてはまだ勉強するのと思う。今日のはかれこれ休憩を挟みながらも、7時間以上も勉強したのだ。休日でこれほど勉強した日なんか1日も無いと断言できる。

「いや。今日は流石に疲れたよ。もう休ませてくれ」

「そうか。それじゃあ私は帰らせてもらうよ。また明日。学校で会おう」

なにか言いたそうな顔をしながら彼女は帰った。もっと勉強しろとでも言いたかったのだろうか？ それだとしたら本当に今日は勘弁してもらいたい。これ以上は熱暴走で強制終了してしまうだろう。勉強は思った以上に体を蝕んでいるようだ。まだ6時前だというのに睡魔という名のウィルスがメインシステムに攻撃を仕掛けてくる。高く積まれた石垣は勉強によって崩壊された今、大将は大量の雑兵に囲まれている。しまいには首が落ちるだろう。首が落ちる前にベッドの中に潜り込む。昨日寝ていた瞳さんの香りが残っている。それを確認するあたり、本当に変態だと実感する。でもこれは年頃の男なら仕方ないと、誰に言うわけではないが言い訳をしているうちに、大将の首がおちた。

目が覚める。今日も誰かが、朝飯を作っているのだろう。また香ばしい匂いがする。でも昨日と匂いが同じだ。

「お隣に住んでる美人のお姉さんが朝食を作っているシチュエーションというのはなかなか良いと評判なのだが、大輔はお気に召さないのか」

「どうしたのさ。こんな朝から。それにどうして朝飯作ってるの？」
今日は制服の上に俺のエプロンを着用し、昨日と同じものを作りながら彼女は台所に立っている。朝や、休みの日はいつもポニーテールにしているのだろうか？ 今も髪を一つに束ねている。たんに料理の邪魔というだけかもしれないが。でも同じ髪型は新鮮味に欠

けるといふか。でも、そのポニーテールも似合っている。

「ただ、隣に住んでいることがばれてしまったからさ。それに、一人で食べるのも味気ないじゃないか。それで？ 新鮮味がないということは、私といることすら飽きてしまったのかい？」

確かに1人で食べるのは味気ないし、寂しい。それより、新鮮味がなくなったからといって飽きてしまつて。早計すぎるだろう。ただ褒めただけなんだから。

「2人で食べるのは良いんだけどさ、2日連続で同じ朝食っていうのはどうかと思うんだ。小中学校の臨海学校とかでも同じ朝食は無かつたけど」

俺がいた小学校では同じようできてどこかが違う料理が出されていた。納豆がついていたりいなかったり。

「同じメニューなのは大輔の所為だ。君がちゃんと買い物をしてあげばこんなことにはならなかつたんだぞ。そのかわり、お弁当は私の家にある食材を使ったから昨日とは違う料理だ」

昨日の昼飯はカップラーメンと、料理とは言えないモノだったし、流石にお湯がない学校でカップラーメンなんては食べられないので必然的に違う料理になるだろう。

「その弁当箱で俺が食べるの？」

これは失礼でしかないが、また瞳さんを見る目が変わってしまった。でもこれは仕方ないことだ。なにしろ、弁当箱がデフォルメ化された虎の顔の形をしていて可愛い。

「馬鹿も休み休み言え！ これは私のものだ。大輔のお弁当はこれから詰めるんだ。そのためにここに来たと言っても過言じゃない」

もし俺があのお弁当箱で食べてみよう。石田にからかわれることが目に見えている。

「俺の弁当箱だつたらその食器棚に入ってるよ。それにしても、瞳さんの手料理か。おいしいんだろうね」

昨日2食、今日1食と食べていて味の心配なんかする必要が無く、弁当もおいしくいただけるだろう。昼休みが楽しみである。

「そんなに楽しみにしてくれるなら作り手冥利に限るけど、こんなことをするのは今日だけだからな」

ビシッとブラウスがこすれる音を出しながら俺を指差しながらそう言う。

「人を指差すのはやめなさい。いくら人差し指って名前があってもそれを実行するのは行儀悪いんだよ。だから犯人はお前だとか言いながらやるのは最もやっちゃいけないんだからな」

探偵モノのアニメや漫画で簡単に行われていることだが、あれこそ規制させるものではないのだろうか？ それとも犯人には人権と云うものはないと考えているのだろうか？

「君はいつたい何を考えているんだい？ 答えとしては犯人も人権は存在しているよ。人間なのだからね」

「まあそれがどうしたのかって話だよな。やっぱいつもとは違う朝だからかな？ こんな変なこと考えちゃうの」

それにしても、瞳さんの行動は予測が付かないというか、やられるこっちとしては困った。

「さて、大輔はそろそろ食べ終わらなきゃいけないんじゃないか？ 寝癖はひどいしそのまま学校に行くわけではあるまい。ちゃんと身支度して登校するんだよ。私は私で準備があるから家に戻るけど、遅刻なんてしたら許さないよ。見導部の部長なんだからね君は」

確かに、そろそろ食べ終えなきゃいけない時間だった。急いで朝食を口に運び食道に流し込む。

「大輔だって、リスのように口いっぱいを含むじゃないか。確かに可愛いかもしれないその顔は」

今は急いで口の中に料理を詰め込んでしまい返答できないので、ボディージェスチャーで言いたいことを伝えようとしたが、彼女は俺のほうなんか見ずに出て行ってしまった。言い逃げされてしまったのだ。

弁当は後からとりに行けば良いだろうし、今は身支度を整えようと洗面所に向かうと鏡に映った自分を見て驚いた。

髪はワックスなどつけていないのに、石田のように無数の棘があるというわけではないが、棘が出来ていたのだ。

そして、もう一つこのままでは学校どころか外にも出ることが出来ない理由が出来た。額に黒マジックなのだろうか、大きく【肉】と書いてあったのだ。やるのが古いというか、どうしてこんなラクガキをしたんだろう。もし油性だったら数分で落ちわけ無くしばらくは額を隠しながら生活するしかない。

結局額に書かれた文字は水性ペンで書かれたので簡単ではなかったが落とすことは出来たが、今から学校に行っても完全に遅刻なのだ。あれほど俺に遅刻するなと念を押した人の所為で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9401z/>

私には視えている

2012年1月1日22時48分発行